

# どこにもない南海「理想郷」

## W. S. Maugham の南海作品における「逆行するユートピア」表象

幸 寧

### 1、背景

19 世紀末に西洋列強が海外へ進出を進めるにつれ、より多くの土地が西洋の支配下に置かれた南海植民地は、西洋人にとって、もはや空想の地ではなく、夢や野望を叶える住み心地の良い土地となった。武力的征服や貿易を主としたポルトガル人やオランダ人といった初期の植民者とは異なり、19 世紀以降のイギリス人は政治、経済、文化的教化を通じてより全面的な干渉を行った。これらの植民活動に関する記録は、西洋人の南海「理想郷」への幻想をかき立て、豊かな創作活動に刺激を与えた。本論で考察する作家 W. S. Maugham もその一例である。彼は南海に関わる出来事に駆り立てられ、1910 年代から 20 年代にかけて南海への三度の旅によって、一連の南海を舞台にした作品で名を博した。彼のマラヤでの体験に基づく短編は、イギリス殖民者の異国での境遇を生き生きと描き出したことで、マラヤを「Maugham country」と称されるほどになった。

### 2、「逆行する」ユートピア

Maugham の初めの南洋への旅は第一次世界大戦の最中であり、太平洋の島々は主に西洋諸国によって占領されていた。戦間期に彼が訪れたマラヤは、戦後急速に復興したゴム産業が隆盛を極め、イギリスの直轄植民地として台頭していた。その背景の中、Maugham の南海物語には、西洋の植民地計画に合致するユートピアがよく表現されるが、植民地での開拓精神を讃えるのではなく、その環境に置かれた人物の人間性における一貫性の欠如を掘り下げることが彼の南海物語の基調である。そこで、西洋文明から離反する夢想家たちに注目したいの、未来志向に逆行するユートピア的想像が頻繁に表象されていることである。それらのユートピアは、聖書が語る楽園、前近代の封建共同体、牧歌的な田舎生活などの「過去」の再生産を試みる。本論では、いわゆる文明から逃避し、ノスタルジック情緒あふれるユートピアが帝国の植民地主義との共犯関係を免れるのか、また一見平穏な南洋植民地で、良い過去を取り戻すことが可能なのかという問題を明らかにしたい。

### 3、関連コンセプト：Bauman が提唱した<Retrotopia>と Boym の nostalgia への批判

社会学者 Zygmunt Bauman は *Retrotopia* (2017) で、断片化する現代社会の中、未来への不安を持つ人々が「過去」へ回帰する願望を<Retrotopia>と提唱した。Bauman は<Retrotopia>が出現しつつあること、そしてそれが示す幾つかの撤退現象に警鐘を鳴らしている。また、Bauman がよく援引している比較文学者 Svetlana Boym の nostalgia への研究が示しているように、globalization が進む中で、Global Village への憧れと対照的である nostalgia も世界規模で流行している。この現象について、Boym は、動揺する時代において nostalgia が防御メカニズムとして出現するのは不可避であることを提示している。Maugham が南海物語を執筆していた時代に目を向けると、第一次世界大戦と戦間期を経験した Maugham による南海物語は、植民地の暗い側面を垣間見せることで、当時の時代感覚を反映している。作中で未来志向の破綻だけでなく、未来に逆行するユートピアも植民地での衝突により攪乱され、稀に理想を叶えるものの、その実現は不徳や不正によるものが多い。本論は、Bauman の<Retrotopia>と Boym の nostalgia 批判を踏まえ、Maugham の南海物語において、「過去」を追求するユートピアに潜む危険性や問題点を浮き彫りにすることを目的とする。

### 4、置き換えられる植民地の「過去」

Boym の nostalgia に関する考察は、nostalgia というのは歴史を個人的または集団的な神話に変え、時間を空間のように再訪することを望んでいることを示している。Maugham の南海物語における白人移住者と原住民との葛藤を見ると、白人移住者が追求する「過去」が現地の歴史を置き換えることは、Boym のその見解の表れとして捉えられる。そこで、「逆行するユートピア」の実現に浮上する原住民への抑圧・アイデンティティの抹殺という問題は、混血結婚の物語“Red” (1921) から伺える。物語は、アメリカ人船長が南海の島を訪れ、約 30 年間島に住むスウェーデン人 Neilson との出会いから始まる。Neilson は昔から伝わる美青年 Red と少女 Sally の伝説的な恋愛物語に魅了され、その物語を船長に語り続けることには、彼の深いノスタルジア感情が随所に見られる。26 年前、病で余命わずかだと宣告された Neilson は島に来て、恋人 Red が捕鯨船に連れ去られたことを悲しんでいた Sally と出会い、涙にくれる美しい彼女に見惚れた。Sally の過去と Red の美しさへの想像は、病弱な Neilson に活

力を与え、彼は Sally への一途な求愛を始める。しかし、第一人称からの Neilson の語りにおける Sally という人物を見てみると、彼の過去への空想では少女 Sally が完全に彼の欲望対象にされた一方、Sally との結婚生活についての回想では、彼女が不幸であり、冷淡な態度しか示さなかったことがわかる。Sally の実際の登場は Neilson と船長が出会った現在である。三人称視点から、今の Sally はただ肥満の老女に過ぎない。物語の最後、目の前にいる醜悪の船長がまさかあの Red と同一人物である事実、そして昔の恋人も認識できない妻の愚鈍さに衝撃を受けた Neilson は、無駄に年月と感情を費やしたことを悟った途端、島を離れようと考え始めた。Neilson の「逆行するユートピア」に巻き込まれた Sally が彼の幻滅によって捨てられることは推測できる。

「逆行するユートピア」による原住民への抑圧は、“Mackintosh” (1920) においてより激しい対立として描かれる。この短編の主人公 Walker に起こった惨劇の根源——彼の権力に固執することによる原住民への搾取に注目したい。20 年間タルア島に君臨した Walker は、自らのユートピアを具現化しようとする島の環状道路を作る計画と島の自然を破壊する工事は彼の支配欲を露わにする。工事に従事する原住民は Walker の低賃金政策への反発が高まり、彼らは Walker の威圧に屈せず、島の酋長の息子 Manuma を先頭に公正な賃金を要求する。しかし、この要求を受け入れず、Walker は更に原住民を無償労働へと追い込んだことが Manuma に強い殺意を抱かせた。Walker は従来の統治を守り続け、原住民の意志に逆らっても、夢想のユートピア王国を執拗に築こうとする結果、自らの死を招いた。

## 5、避け難い階級間の紛争

「逆行するユートピア」による衝突は、原住民との間だけでなく、白人同士の間にも多発することは Maugham の南海物語において見落とせない特徴の一つである。戦争や家族の没落などで故郷を離れた植民者たちは、出自それぞれであるにも関わらず、「白人」という部類に配属されるため、南海植民地の「理想郷」に來ても階級格差による紛争を避けがたい。現地の環境から隔離された狭い白人コミュニティの中で本土よりも激しい分裂と不安が渦巻いている。短編“The Outstation” (1924) は、奥地の駐屯地にいる白人行政官 Warburton と新任補佐官 Cooper の間の階級と性格などの相違による衝突を描いている。Warburton はイギリス紳士の生活を植民地で再現し、過去の栄光と文明社会との絆を保とうと努めるのに対し、Warburton と異なる出自と価値観を持つ Cooper は貴族階級に対する強い反感を抱いている。その相違は彼らの原住民への接し方にも表れ、最終的には二人の関係を破綻させる。Warburton は自らの「逆行するユートピア」を守るために Cooper の排除を図り始める。Cooper に酷使されるマレー人の報復を放置して、待ち望んだ相手の死を迎えた Warburton は、Cooper の死に解放感を覚え、程なくいつもの紳士の日常に戻った。閉ざされた植民地環境での白人同士の軋轢は、支配層である白人集団に内在する矛盾を浮かび上げらせ、外見的な文明や取り戻そうとする栄光の仮面を剥いだ。

## 6、結論

本論は W. S. Maugham の南海物語における「逆行するユートピア」表象への考察を通じて、かつて西洋人にとって「理想郷」であった南海植民地が理想ではない場所になりつつあるという不穏な動きは、彼の作品から読み取れることを明らかにした。なお、「どこにも無い場所」を内包する「ユートピア」の語源と物語に漂う幻滅感を結びつけて考えると、「理想郷」であった南海植民地はただ西洋の言説あるいは幻想によるものかもしれない。理想化された土地で良き過去を追求すると、実際の過去と架空の過去を混同しがちであり、その願望を叶えるために、人々が批判的思考を放棄し、危険な道に進むのもあり得る。この危惧すべきことは、Maugham の南海物語に描かれている「逆行するユートピア」に示唆されていると言える。

主要参考文献：

Bauman, Zygmunt. *Retrotopia*. Polity Press, 2018. (『退行の時代を生きる一人びとはなぜレトロピアに魅せられるのか』伊藤茂訳、青土社、2018 年。)

Boym, Svetlana. *The Future of Nostalgia*. Basic Books, 2001.

Hastings, Selina. *The Secret Lives of Somerset Maugham: A Biography*. Arcade Publishing, 2012.

Maugham, W Somerset. *The Casuarina Tree: Six Stories*. Heinemann, 1922.

---. *The Summing Up*. The New American Library, 1938.

---. *The Trembling of a Leaf*. Heinemann, 1935.

Morgan, Ted. *Maugham*. A Touchstone Book, 1980.

Shennan, Margaret. *Out in the Midday Sun: The British in Malaya 1880-1960*. Monsoon Books, 2016.

越川正三『サマセット・モームの短編小説群』関西大学出版社、1994年。